

聖木曜日の典礼が終わって信徒の皆さんが帰途についた後、しばらく聖体の前で祈った。部屋に戻ってテレビをつける

と、イラクで三人の日本人の方が人質として捕らえられたニュースが流れていた。猶予は三日間。「三日間」という言葉が気になって仕方がなかった。「聖なる三日間」と重なった。こうしてことしの「三日間」は、今までのどの「三日間」よりも重い「三日間」となった▼イエスの受難、それは三人の方の受難。そしてご家族の方の、日本人

の、そして世界中の人たちの苦難となった。無実の人が死に直面している。聖木曜日も重苦しい一日となった。イエスの

地の塩

苦しみが三人の方の苦しみに重なる。無実の罪を負わせられたイエスは十字架の上で殺される。しかし、その後復活する。

その希望があるからこそ十字架を崇敬することができる。十字架なしに復活はないのだろうか。三人の方の解放を願いながらも、最悪の事態を考えざるをえなかった▼聖土曜日の入園式があった。桜吹雪の中を新入園児たちが笑顔いっぱい園に

来た。華やかさの影でイエスの十字架がちらつく。式が終わってホールに残った保護者と三人の方の解放を祈りながら、真の平和な世界をつくる決意を新たにしました。夜、「徹夜祭」が終わり、重い疲れの中で床についた。午前三時すぎ、枕元の携帯電話にメールが入った。「起こしたらゴメン！ 今、速報で、三人を二十四時間以内に解放すると入りました。かなり奇跡！ 神様をあらためて実感しています」。一人の青年が知らせてくれた▼宗教、人種、空間と時間を超えて、愛のみが人を死から救うことができる。「愛といつくしみのあるところ、神はそこにおられる」。聖木曜日の賛歌が思い出された。その一週間後がことしの復活祭だったのかも